

～その他の世界遺産～

恵比須ヶ鼻造船所跡

(えびすがはなぞうせんじょあと)

1853年(嘉永6)、幕府は各藩の軍備・海防力の強化を目的に大船建造を解禁し、のちに萩藩に対しても大船の製造を要請しました。1856年(安政3)、萩藩は洋式造船技術と運転技術取得のため、幕府が西洋式帆船の君沢型を製造した伊豆戸田村に船大工棟梁の尾崎小右衛門を派遣します。尾崎は戸田村でスクナー船建造にあたった高崎伝蔵らとともに萩に帰り、近海を視察、小畑浦の恵比須ヶ鼻造船所に軍艦製造所を建設することに決定しました。同年12月には萩藩最初の洋式軍艦「丙辰丸」が、また1860年(万延元)には2隻目の洋式軍艦「庚申丸」が進水します。丙辰丸建造には、大板山たたら鉄が使用されたことが確認されています。



萩反射炉向かって右側の海には恵比須ヶ鼻造船所跡が見えるよ！

萩商工高校
マスコットキャラクター
しょこもん



郡司鑄造所で作られた大砲(模型)

萩の史跡を辿る

萩反射炉

はぎはんしゃろ



萩反射炉 (はぎはんしゃろ)

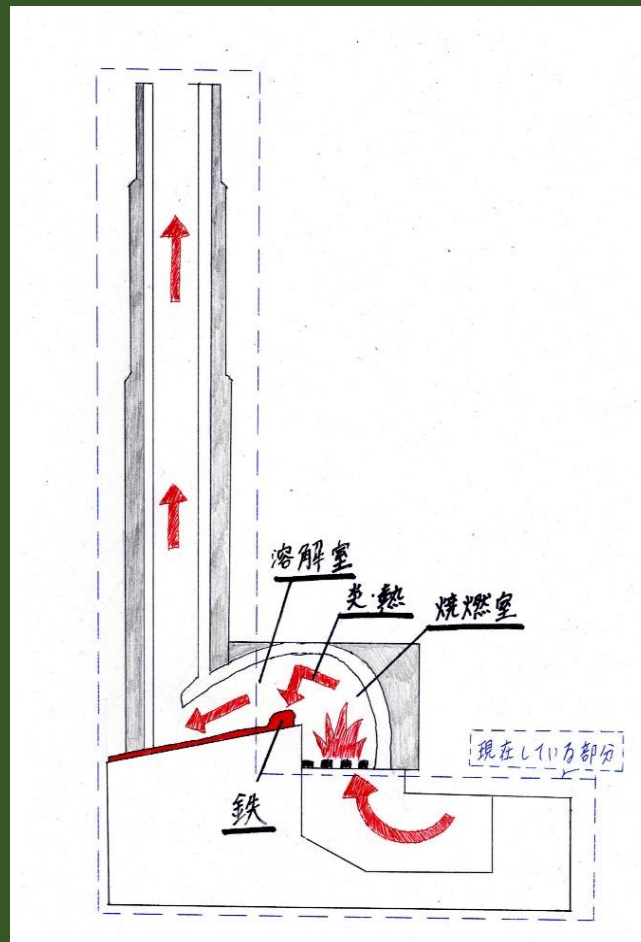
世界遺産「明治日本の産業革命遺産」は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、西洋の技術が日本に移転され、急速な産業化を成し遂げたことを証言する産業遺産群です。岩手県から鹿児島県まで8県11市に広がる23資産で構成されています。

萩反射炉は、萩藩が海防強化の一環として、鉄製大砲を鑄造するために、1856(安政3)年に試作的に築造した金属溶解炉です。しかし、技術的にも費用的にも難しいことから、萩藩は本式の反射炉の築造は断念しました。なので萩反射炉では鉄を製造しておらず、実際に鉄を製造していたのは、郡司鑄造所という場所です。

萩反射炉は幕末に、萩藩が自力で産業の近代化を目指す中での、トライアル&エラー(試行錯誤)を証明する貴重な遺産です。

郡司鑄造所にも行って見てね!

萩反射炉は、**笠山の”安山岩”**で作られました! 萩城下町の白壁の土台にも使われています!



反射炉の構造図

一般的な反射炉の構造は、炉と煙突に大きく分けられます。焼燃室で炊いた燃料の炎と熱を浅いドーム形の天井に反射させて、溶解室においた原料鉄に熱を集中させて溶解させます。高い煙突を利用して大量の空気を送り込み、炉内の温度を千数百度にして、鉄に含まれる炭素の量を減らし、鉄製大砲に必要な軟らかくて粘りのある鉄に変えます。

郡司鑄造所(ぐんじちゅうぞうしょ)

松下村塾の北側にある、萩藩のお抱えの鑄物師だった郡司家の鑄物工房の遺構を移築復元整備した広場です。

郡司家は、鍋・梵鐘のほか大砲などの兵器の鑄造を営んでいました。嘉永6年(1853)のペリー来航をきっかけとして幕府が公布した「洋式砲術令」によって、同年11月、萩藩は郡司鑄造所を藩営の大砲郡司鑄造所に指定し、大量の青銅製大砲を鑄造しました。ここで鑄造された大砲は、江戸湾防備のため三浦半島に設けられました。

萩藩の陣屋に運ばれ、また文久3年(1863)、下関海峡での外国船砲撃、元治元年(1864)、同海峡での英・仏・蘭・米連合艦隊の戦争(下関戦争)にも使用されました。

郡司鑄造所は、在来技術である「こしき炉」によって西洋式大砲を鑄造しており、近代技術へと移行する過渡期を物語る産業遺構として貴重なものです。なかでも、西洋式の青銅大砲を鑄造し、一番深いところで4.5mある石組大砲鑄造遺構は日本一です。

